



日刊薬業

発行所

株式会社 薬業時報社

東京都千代田区西神田2-4

(西神田ビル)

電話(262)3511~9・0807(直通)

大阪支局

大阪市東区淡路町2の6船場ビル

電話(231)7162・8531~9番

購読料金一ヵ月1,700円

振替東京23208番

(日刊,但し土・日曜日休刊)

昭和四十年十月二十二日(金曜日)第一七八六号

薬剤費一部負担は見送り

保険審査会 薬価の適正化では意見一致

保険三法改正諮問案を審議した二十日の社会保険審議会はこのうち薬剤費一部負担と総報酬制は見送ると答申した。これにより業界にとってマイナスとされていた薬剤費一部負担は当面実現されないことになった。

業界ではすでに反対の意向を明らかにしているが、審議会においても赤字の原因は「薬剤費の急激な増加による」と認めながらも、一部負担については①制度の大きな後退(被保険者、公益)②基本的な対策以前には不適當(事業主)③薬剤費の増嵩に対する抑制効果はない(公益)との意見から見送られたもの。しかし薬価基準の適正化について今後検討すべき点には各代表とも意見が一致し、今後この面での論議が行なわれよう。なお、鈴木厚相は「診療報酬体系に関しては三法改正案をまとめた後に諮問する」ことを明らかにした。

日薬 安定協に代表送らず

日本薬剤師会の新役員による第一回目の全体理事会が初めて公開で二十日開かれた。武田会長は①機構改革(定款改正)②薬事制度の改善(適配条例に弾力性を持たせる等)③薬業経済の安定(特殊指定問題など)④医薬分業の推進、の四事業についてあらゆる角度から検討するための特別調査会(仮称)を設置したいと提案、早急に設置することが決定された。

また中央薬業安定協議会の日薬代表委員三名が欠員となっているため、これの選任がはかられたが、「特殊指定についての日薬の方針を決めるのが先決である」との意見が大勢を占め、委員は決められなかった。したがって十一月九日開催の安定協には日薬委員は欠席ということになった。

大阪安定協 零 売 小 委 設 け る

大阪薬業安定協議会は二十日午後大阪薬業クラブで開かれ、試買及び零売について協議した。試買は九月中旬から一カ月間についての報告で、それによると各社とも不良店の二、三軒を共通して指摘している。これらの割引率は指導価格の一割前後である。零売（大入包装）の問題は、OPCからこの問題を安定協で検討するよう要請したもので、関係メーカーを含めた小委員会を設け、具体的な検討に入ることとした。

なお、大阪府の薬務課では零売についての取扱いに関し、府薬剤師会宛通達を出しているが、吉矢府薬会長はこの件を会員に流すことをためらっている。その理由として①零売を奨励する結果になりかねない②逆に薬局業務の制限が懸念される——の二点の見解を挙げている。

大阪府薬審 ヒゲチ河内店の開業許可保留

大阪府薬事審議会は十八日午後、府庁別館で開かれ諮問を受けた薬局等の許可申請八件について審議した。うち距離制限にふれるヒゲチ薬店（河内市大字鴻池六二四）を除く七件について許可答申を行なった。内容は①個人から法人へ三件②法人の変更二件（以上いずれも薬局）③移転一件（一般販売業）④薬局（娘）から薬種商（父）へ一件。

なお、審議に先立ち任期をおえた会長を互選した結果、引き続き四宮恭二氏（大阪府教育委員）を再選した。会長不在の場合の会長代行は賀集一氏。

訪 中 製 薬 代 表 団 25 日 出 発

日中医薬協議会（北村徳太郎会長、東京・日本橋兜町）では、中国政府（中国国際貿易促進委員会Ⅱ南漢震主席）の招きにより医薬メーカー代表団を派遣することに内定していたが、このほど同協議会・薬貿委員会（川勝伝委員長）が推せんした新薬（化学合成）メーカー二社、家庭薬メーカー二社、原料メーカー（成分抽出）一社の会員メーカー計五社が正式に決定し中国側に認められたので、十月二十五日羽田を出発、約三週間の予定で訪中することとなった。なおメーカーの正式な訪中代表団は戦後はじめて。団員名は次のとおり。

▽団長Ⅱ津村重孝（KK津村順天堂専務取締役）▽副団長Ⅱ中比良次郎（三共KK取締役製品計画部長）▽団員Ⅱ堀部良克（協和醗酵工業KK医薬営業部学術課長）▽同Ⅱ渡辺俊邦（KK竜角散製造部長）▽同Ⅱ立崎浩（KK常盤植物化学研究所取締役社長）▽秘書長Ⅱ大島徳弥（日中医薬協議会薬貿委員会理事、友好商社大徳商事KK取締役社長）

(第三種郵便物認可)

業

業

刊

日

昭和 40 年 10 月 22 日 (金)

(2)

協和醸酵 ATP の直接醸酵法開発

協和醸酵東京研究所（木下祝郎所長）は、かねてから研究を進めていた ATP（アデノシン・トリホスフェイト）の直接醸酵法による製法開発に成功した。同社はこのほど、海外へのバルク輸出・国内へのバルク販売などの活動を開始したが、最終製品として同社販売ルートにのせることも検討中といわれる。

直接醸酵法による ATP の生産は、世界でも初のケースに属し、高純度のものを安価に得られるというので注目されており、すでに海外からは数件の引き合いが寄せられているという。

藤沢薬品 「プレコール錠」「同 H」新発売

藤沢薬品は、このほど非ピリン系感冒治療剤プレコール錠と新感冒治療剤プレコール H（顆粒）を新発売した。プレコール錠は三錠中成分サリチルアミド五〇〇 mg、フェナセチン一六五 mg、無水カフェイン五〇 mg、ノスカピン一〇 mg、マイレン酸クロロフェニラミン二・五 mg、ビタミン B₁ 硝酸塩五 mg、ビタミン B₂ 三 mg、ビタミン C 五〇 mg、ビタミン P（ヘスペリジン）二〇 mg、二五錠 A 価一六〇円、B 価一二〇円、六〇錠 A 価三四〇円、B 価二五五円。プレコール H の成分（一包、二 g 中）はスルピリン三三〇 mg、濃厚カクコン湯エキス一四〇 mg、無水カフェイン五〇 mg、マレイン酸クロロフェニラミン二・五 mg。六包 A 価一八〇円、B 価一三五円、十二包 A 価三二〇円、B 価二四〇円。

R・M・バードマン氏談 日ア社の業績は最高に

アップジョン・インターナショナル社社長ロバート・M・バードマン氏は夫人同伴で十九日、日本の市場調査のため来日した。同氏は二十日午後記者会見（日ア社社長西川虎次郎氏、ア社国際広報部長ドン・オミアラ氏、日ア社副社長ロナルド・G・チエンバーズ氏らも同席）し次のように語った。

一、日ア社はア社が世界二四カ国にもつ子会社のうち、極めて良好な成績をあげている。十月十八日、チエンバーズ氏が「W・E・アップジョン賞」を得たことからも承知して頂けよう。一九六六年には全子会社中最上の売上と利益を示すと思われる。

一、日本での副腎ホルモン剤の価格競争状態は、極めて遺憾なことだ。しかし当社には最近新発売した抗生物質リンコシン、糖尿病薬トリナーゼなどがあるので、今後の業績には十分の自信をもっている。なお日本での生産態勢については、住化がこれを受け持ってくれているので、いまのところ必要はない。しかし日本で作った方が経済的だという考え方は現実化しつつある。

局方外医薬品製造許可承認品目

(▼印―特審品目、○印―総合)
感冒剤、○印―鎮咳去痰剤

九月十八日 (統)

◎救心感冒薬コンバ錠 (救心製

九月二十一日

◎アミド散 (佐賀製薬―佐賀) ▼オル

薬) ▼新シチン錠 II 解熱鎮痛剤 (全業工業) ◎オキ

ゴール顆粒 II 解熱鎮痛剤 (日本薬品―佐賀) ◎ピラ

サルミン糖衣錠、同五〇 mg (第一) ▼ハロスゲン錠

ミン S (天恵堂製薬―佐賀) ▼オックスロイド錠 II

II 抗ヒスタミン剤 (中外) ▼新アルベンうがい薬 II

たん白同化ステロイド剤 (牛津製薬―佐賀) ◎リコ

含そう剤 (中外) ▼スルキシシンカプセル II サルファ

デ S 錠 (大貝製薬―徳島) ◎小児解熱散 (徳島製薬

剤 (中外) ▼塩化ベサネコール散「イセイ」 II 自律

―徳島) ▼ネオシン II 解熱鎮痛剤 (アイフ製薬工業

神経剤 (山形医師) ▼ヒメロン K₁ 剤 II V E・K 剤

―徳島) ◎ヒラミンエース (松田薬品工業―愛媛)

(東亜栄養) ▼アラブリンシロップ II 整腸剤 (幸和

▼オロベリン軟膏 II 創傷保護剤 (キング製薬―岡

薬品工業―東京) ▼ロマンニット II 血管拡張剤 (幸和

山) ◎アスマリンド T、アスゼット M、アスリチン

薬品工業―東京)

G、アスレス N (荆盛堂薬品―和歌山)

販売力強化に努力

藤沢薬品

兜町だより

藤沢薬品の販売強化策が注目されている。同社はこの十月から田辺、三共、第一、中外に続いて再販売価格維持契約を実施、フジサワ会を発足させた。こ

れは小売店を組織化することによって売上増と代金回収期間の短縮を図ろうとするもので、特約店百店をとりあげ傘下小売店約五千店でスタートしたもの。同社では①特色ある製品の発売②小売店に画一なノルマを与えないなどを特長としているが、ユニークな製品を軸に販売組織と価格の安定に取り組む方針。同社はこれまで関東地区での知名度は比較的低いとされていた。そして製品は優秀だが、販売力がやや不足しており、販売力強化が大きな課題となっていた。このため現在建設中の静岡県富士工場が来春完成するのを機会に関東地区に大きく進出しようとする意向である。今度のフジサワ会発足もその一環であり、プロパー (訪問宣伝員) を増強して末端の小売店と開業医との結びつきを強めていく方針。

ところで業績だが、ノイビタ、チオクタンなど主力の大衆薬は伸び悩み傾向にあるが、神経系薬剤タンデリール、消化器系薬剤セルターゼなどが好調であり全般に医家向けが依然として好業績をあげている。前九月期は売上げ八二億円、利益五億三千万円を達成したものと見られ、引続き増収増益基調にある。利益率も四二%と向上、一割五分配当にはゆとりがある。来春の富士工場完成で生産力が増大する一方、販売店の組織化に成功すれば同社の業績はさらに安定度を加えるものと見られる。なお富士工場建設にからんで一部に増資期待がもたれているが、今のところ四十一年秋以降になるものと予想される。

〔お断り〕本日の株式欄は休載します。